

安東長義と「安東偉人文庫」

宇治郷 毅

まえがき

4年前、本年報（第38号、2012）に「同志社が生んだ図書館人—同志社図書館山脈の源流と先駆者たち」なる拙文を発表した。この中で同志社大学図書館の歴史に触れた時、同志社創立以来この図書館の蔵書に占める校友・同窓（卒業生など）、篤志家、教職員などの寄贈の多さと質の高さに敬服した。これらは、いわゆる「・・・文庫」の名で記録され所蔵されてきたが、1889（明治22）年寄贈の「小室・沢辺記念文庫」（明治初期に自由民権運動で活躍した小室信介、沢辺正修を記念したもの、5,146冊）から始まって、主要なものだけでも1974（昭和49）年の「ケーリ文庫」（947冊）まで24文庫を数えている。戦前寄贈のものは18文庫あり、24,703冊に達している⁽¹⁾。これら寄贈図書は、すべて同志社教育に寄与したいという寄贈者の篤い思いのこもったものであり、過去においては同志社大学図書館蔵書の主体となっていた。特に戦前では、この図書館の購入経費が貧弱であったことを考えると、これら文庫の価値の大きさは十分理解できる。

ところで私が前記拙文執筆時関心を引かれたのは、今回取り上げる「安東偉人文庫」である。なぜ「偉人」という名が付けられているのか。どのような内容のものか。なぜ安東長義（あんどう・ながよし）という人は長年にわたり毎年図書館に文庫維持のために寄附をしたのか。そもそも安東長義とはいかなる人物なのか。いろんな疑問が起こってきたが、この人物についてはまとまった資料や先行研究がなく、その時は詳しく調査する時間的余裕がなく不明のまま終わった。

ところで今日、安東長義といっても同志社関係者でもその名を知る人は少ない。今やほとんど忘れ去られた存在であると言っても差し支えない。しかし注意してみると、同志社大学今出川キャンパスのメインロード（「パーポスロード」と命名されている）の両脇には寄贈者であるこの人の名が刻まれた「楠樹並木」が学園の長い歴史を見守っている。また本稿で取り上げる「安東偉人文庫」としてもこの人の名は図書館に残っている。直接にこの人物の名を知らなくても、この人は樹木や本を通じて知らない間に教職員や学生に深い影響を与えている。それだけでなく、この人は現在忘れられた存在とは

いえ、これから明らかにするように多くの社会的貢献によって同志社史において、また日本社会事業史において重要な存在である。

本稿では、現在判明した安東長義の生涯と活動を略述し、その代表的な功績の一つである「安東偉人文庫」をとりあげる。そして、この文庫寄贈が彼のどのような思想的背景から行われたかを考察する。

第一章、安東長義の生涯と業績

1、略歴

安東長義は1888（明治21）年5月鹿児島市に生まれ、旧姓は藪田であった。北海道で集治監典獄（現在の刑務所長）をしていた義兄が同じく北海道で監獄教誨師をしながら監獄改良運動にたずさわっていた留岡幸助（同志社出身で著名な社会事業家）と親しかった関係で留岡と知り合うことになる。その縁で1908（明治41）年3月、東京巢鴨に留岡が設立、運営する「家庭学校」と関係するようになった。家庭学校は非行少年のための感化教育を行う教護施設であったが、安東は同年5月より1913（大正2）年まで留岡の書生をしながら、事務や児童の教育および家庭学校の私塾「思齋塾」の手助けをした。この間留岡の人格とキリスト教信仰に深い感化を受け、その影響で留岡の母校である同志社大学神学部に進み、1918（大正7）年3月卒業した⁽²⁾。

卒業と同時に日本組合基督教会系の大阪の「浪花教会」伝道師となった。1920（大正9）年、大阪にあった全国の医学薬学関係情報の出版社である「薬石日報社」に入社、社主安東忠次郎の長女庸子と結婚、安東姓に改名した。以後社業に専念し、後に同社専務取締役社長になった。もともと日本組合基督教会「芦屋教会」の教会員であったが、義父安東忠次郎が1930（昭和5）年自宅の一部を無償寄付して「岡本教会」（戦前は日本組合基督教会所属、現在は日本基督教団に所属、神戸市東灘区岡本）を設立したのを機に当教会に移る。以後篤実なキリスト教徒として当教会を支えただけではなく、キリスト教界発展のためにさまざまな活動を行った⁽³⁾。

安東は実業家として家業の出版業に専念するかたわら、同志社と家庭学校に対して大きな貢献をした。同志社に対しては、1935（昭和10）年同志社理事、1939（昭和14）年「同志社大学社会事業学教育後援会」理事（後に副理事長）となり貢献した。家庭学校に対しても理事となり、経営に努力した。

戦後1946（昭和21）年4月、新生日本の進路を選ぶ最初の国政選挙である第22回衆議院議員選挙があり、安東は京都府選挙区から無所属で立候補した。安東はもともと政治に関心をもっていたが、日本における社会事業発展のためには政治への進出が必要であると考えたものと推測される。結果は落選し、その費用の穴埋めのため家屋敷を手放す

ことになった⁽⁴⁾。

晩年は同志社嘱託として大津市唐崎にあった「同志社ハウス」管理人となった。老人ホームの創設などを企画していたが果たせなかった。1958（昭和33）年12月19日、脳血栓のため急逝した。同月21日、岡本教会葬にて告別式が盛大に挙行された。社会奉仕のため、金、労力、智識など持てるものすべてを捧げた人生であった。

次に、安東の社会活動についてより詳しく点検し、その歴史上の意義を明らかにしたい。

2、社会活動

（1）家庭学校に対する貢献

安東長義が生涯にわたり師と仰いだ留岡幸助については、戦前日本の社会事業に多くの逸材を輩出した同志社の中心人物として、また近代日本における「民間社会事業の先覚者」、「日本の代表的キリスト教社会事業家」としての評価が定まっている。

留岡は同志社英学校別科神学科邦語神学課程で神学を学び、1888（明治21）年卒業、一時「丹波第一教会」で牧師をしていたが、1891（明治24）年北海道「空知集治監」（集治監は現在の刑務所）の教誨師となって赴任し、監獄改良の必要性を痛感した。そのため1894（明治27）年より2年間アメリカの監獄でその運営思想と方法を学ぶため留学した。帰国後、一時東京の「霊南坂教会」で牧師をした。1899（明治32）年東京巣鴨に独力で「家庭学校」（後に「東京家庭学校」（東京都杉並区高井戸東）と改称）を創設し、その経営に専念した。これは非行児童（少年）に対する感化教育のための「感化院」（現在の児童自立支援施設）であった。安東はこの家庭学校で1908（明治41）年から1913（大正2）年まで5年間留岡校長を助けて働いた。居住の児童は学校内の私塾（思斉塾）で学ぶか、町の学校へ通った。児童には毎日学習の他、施設の清掃（共同作業）と礼拝が義務としてあり、生活の中で社会常識とキリスト教精神を学んだ。留岡校長は来客、電話、書面、内務省への連絡、校内掃除の指揮および精力的な執筆活動により多忙をきわめたが、安東は校長の書生として熱心にそれらの校務を手伝った。また私塾で教えるかたわら、家庭学校の機関誌『人道』が1905（明治38）に留岡によって刊行されると「人道社員」として編集を手伝った⁽⁵⁾。

一方、留岡は『感化事業之発達』（1897年）、『慈善問題』（1898年）という日本で初めての慈善事業に関する体系的な著書を出版し、『人道』とあわせて日本における社会事業の啓蒙、発展に大きな貢献をした。同時にまた「警察監獄学校」教授や内務省地方局および宗教局嘱託となり監獄行政や地方改良事業に携わった。この体験より「報徳運動」に関心を深め、農民救済のための地方改良運動に関与した。

さらに非行児童の感化教育の全国的な発展を図るため、1914年（大正3）には北海道

紋別郡上湧別村に「家庭学校社名淵分校」（現在の「北海道家庭学校」の前身）を、1923（大正12）年には神奈川県茅ヶ崎にも分校を設立した。しかし経営難で「茅ヶ崎分校」は1933（昭和8）年廃校し、巣鴨の家庭学校も留岡が1934（昭和9）年に逝去した直後に東京中野に移転した。留岡の生涯は、日本における感化教育と社会事業の発展に捧げた生涯であった⁽⁶⁾。

安東は、実業界に入って以後も、家庭学校への支援は続けた。そして再び家庭学校に直接関与するのは留岡逝去後のことである。安東は、留岡逝去とともに家庭学校が苦境に陥ったのを看過できず、1938（昭和13）年夏二代目の家庭学校長牧野虎次に同行して遠軽村の分校「北海道家庭学校」を視察、翌年1939（昭和14）年1月家庭学校理事になった。以後逝去する1958（昭和33）年12月まで理事として経営に参画した。財政的支援をただけでなく、機関誌『人道』にも時々執筆した⁽⁷⁾。

安東は家庭学校を通じて戦後日本の社会事業に関与したのであった。

（2）同志社に対する貢献

安東長義が同志社に果たした貢献の第一は、同志社大学の理事としての貢献である。1935（昭和10）年4月から1939（昭和14）年3月まで同志社財団理事および同志社財団評議員を務め、同志社創立60周年記念事業（1935年）など大学経営に参画し、その手腕を発揮した。

第二は、「社会事業学」への貢献である。1931（昭和6）年4月同志社大学は文学部神学科に日本で最初の「社会事業学専攻」を設置し、キリスト教の社会实践・社会事業のための人材育成に進出した。この専攻では、従来の社会事業、社会政策、福利施設などを研究教育領域とした。しかし時勢は、日中戦争以後の国防国家体制の確立にともない厚生省の新設をもたらし、それにともない厚生行政も「人的資源の保護培養」、「国民生活の確保刷新」を目指すものとなった。それにともない同志社においても、1941（昭和16）年4月文学部が改組され、従来の英文科、哲学科に社会事業学専攻が加えられて新たに「文化学科」が創設された。そのため社会事業学は「厚生学」と改称し、文化学科に所属した。ここに「慈善事業」から始まった「社会事業」は「厚生学」に発展し、戦後の「社会福祉」へと継承されていく端緒が開かれた。

以上の社会事業学専攻を支援するために、1931（昭和6）年春「同志社大学社会事業学教育後援会」（後に「厚生学教育後援会」に改称）が、日本組合基督教会社会部委員であった安東長義、濱田光雄、竹内愛二と同志社大学竹中勝男により設立された。大澤徳太郎が理事長、安東は常務理事の一人に選出された（後に副理事長になる）。同後援会は、厚生学講座担当教授の確保、「同志社大学厚生館」（診療室、薬局、教職員・学生のための読書室（「森下文庫」）、教授研究室などの施設を備える）の運営支援、厚生学

専攻教授・学生の研究と実習の場の提供、維持に貢献する。安東は「厚生館」を大沢徳太郎から寄贈を得るために貢献したのみならず、その後の運営のために多額の寄付をした⁽⁸⁾。

第三は、同志社の神学教育への貢献である。1943（昭和18）年、「同志社大学神学教育後援会」副理事長として、戦中、戦後の同志社が苦難にある時期に同志社教学の核心である神学教育の振興に尽力した。

第四は、今出川校庭美化への貢献である。安東は1935（昭和10）年から数年にわたり、校庭美化のために300本を超える楠の苗を寄贈、植樹した。今出川キャンパスのあちこちに植樹されたが、現在は一部がまとめられて「パーポスロード」の両側、北側はハリス理化学館前からクラーク記念館にかけて、南側は明德館、弘風館前からクラーク記念館まで38本が植えられ、一年中緑陰の濃い「楠樹並木」を形成している。安東がこのように多くの植樹をしたのは、校庭美化のためということと、東京家庭学校での留岡幸助の教育理念「教育は天然自然の感化の下にすることが一番大切」ということの影響があったと思われる⁽⁹⁾。

第五は、新島旧邸の保存への貢献である。安東は、1933（昭和8）年6月新島旧邸の清掃修繕費を寄附し、その維持に努めた⁽¹⁰⁾。

第六は、同志社大学図書館への貢献であるが、次節で述べる。

（3）著作活動

安東には著作が少ない。現在確認できたものをあげる。

安東長義編、古賀惣五郎著『明治大正日本薬学史』薬石新報社、1937年

『留岡幸助君古希記念集』留岡幸助君古希記念事務局、1933年12月（安東長義「予の巢鴨時代を想う」収載）

『留岡幸助永眠十周年山室軍平永眠三周年追憶記念集』岡山県社会事業協会、1944年（安東長義「留岡先生を偲びて」収載）

「都市伝道に就いて」『基督教世界』2137号、1924年11月27日 4面

「妙な因縁」『同志社校友同窓会報』86号、1934年5月15日

「留岡氏を繞る人々」『同志社校友同窓会報』89号、1934年9月15日

「同志社を繞る史蹟と史話（一）～（四）」『同志社新報』66号～69号、1942年2月～5月各4面

「博愛社を見る一大阪社会事業巡礼記（一）」『人道』304号、1931年2月15日14面

「大阪婦人ホーム一大阪社会事業巡礼記（二）」『人道』305号、1931年3月15日12面

「弘済会一大阪社会事業巡礼記（三）」『人道』306号、1931年4月15日12面

「大阪と方面委員制度一大阪社会事業巡礼記（四）」『人道』307号、1931年5月15日12面

「淀川善隣館—大阪社会事業巡礼記（五）」『人道』309号、1931年7月15日13面
「大阪労働共励館—大阪社会事業巡礼記（六）」『人道』313号、1931年11月15日10面
「浪速少年院（上）—大阪社会事業巡礼記（七）」『人道』314号、1931年12月15日13面
「浪速少年院（下）—大阪社会事業巡礼記（八）」『人道』315号、1932年1月15日11面
「河陽学舎—大阪社会事業巡礼記（九）」『人道』316号、1932年2月15日11面
「大阪基督教女子青年会—大阪社会事業巡礼記（十）」『人道』317号、1932年3月15日11面
「石井記念愛染園—大阪社会事業巡礼記（十四）」『人道』321号、1932年7月15日8面
「留岡先生御活動の初歩 小鹽先生御生地 綾部を訪ふの記」『人道』（復刊）121号、1943年6月15日2～3面

第二章、「安東偉人文庫」

（1）文庫設置の理由

1934（昭和9）年7月15日発行の「同志社々報」48号には、この文庫の設置された理由と内容について次のような記述がある。

「安東偉人文庫設置

財団評議員安東長義氏ノ寄附ニヨリ六月一日安東偉人文庫ヲ設置シ寄附者の意思ニヨリ偉人伝記及評論等ニ関スル図書ヲ購入シ学生々徒ノ閲覽ニ供スルコトトセリ」⁽¹¹⁾

これにより文庫は安東の「意思」により寄付されたことが分かる。どのような「意思」により寄付されたのであろうか。安東自身がそのことについて記述したものは見いだせないが、購入対象が「偉人伝記及評論等」と限定されているところから推測できる。この点について、安東の親友であった秦孝治郎（元同志社理事長）は「青年立志」を促すための寄附であったと述べている⁽¹²⁾。

安東は、同志社に学ぶ学生から志をもった人材の輩出を願ったのであろう。

（2）寄贈方法

同志社大学図書館には、寄贈された主要な「特殊文庫」として27の文庫がある⁽¹³⁾。これらの文庫の寄贈方法については、次の三つのルートがあったことが指摘されている⁽¹⁴⁾。

第一は、特定の個人の旧蔵書が寄贈されたもので、「植木文庫」「愛山文庫」「生江文庫」「浮田文庫」「三宅文庫」などがそれに相当し、特殊文庫の大部分を占める。これは一般的な寄贈であるが、所蔵者からの寄贈申し込みがあった場合と学校側から寄贈を願い出た場合があり、いずれも一括、一回での寄贈方法であった。

第二は、特定の個人を記念して収書されたもので、「小室・沢辺（記念）文庫」「新島

記念文庫「森田（記念）文庫」などがそれに相当する。記念文庫の場合は、記念の対象である人物の顕彰に重点が置かれていて、興味深い歴史をもつものが多い。

第三は、指定寄附金を基金とし、収集については図書館側が責任をもつもので、本稿の対象の「安東偉人文庫」の他には「小林文庫」がそれに相当する。指定寄附金による寄贈は明確に蔵書の充実を意図したもので、二つのケースがあった。一つは「小林文庫」で、これは小林正直（明治26年、同志社普通学校卒）による寄附金（「小林図書資本」とよばれた基金）の利子による収書で、経済学関係が多いが教育学など他の分野の図書も含まれている⁽¹⁵⁾。

いま一つが安東偉人文庫であり、これは毎年一定額を寄附し、図書購入を図書館に任せて構築されたものである。寄附は、1934（昭和9）年度から1946（昭和21）年度まで、13年度の長きにわたっている。大体各年度一度か二度、100円ないし150円が寄付され、年度合計では、100～300円とばらつきが見られる。判明している寄附について、寄附の日付と金額を以下に記す。すべて「同志社々報」に記載されているものである。

昭和9年度：5月8日 100円

昭和10年度：5月9日 100円

昭和11年度：4月30日 150円 5月1日 150円

昭和12年度：11月27日 100円

昭和13年度：（昭和14年）1月28日 100円

昭和14年度：7月5日 100円

昭和15年度：4月27日 100円 （昭和16年）1月18日 100円

昭和16年度：8月21日 150円 （昭和17年）1月13日 150円

昭和17年度：7月8日 100円 10月6日 100円 （昭和18年）2月13日 100円

昭和18年度：6月23日 200円

（昭和19年度以降は「同志社々報」が発行中止となり、昭和19年度～昭和21年度の寄附額については不明である）

以上のように1934（昭和9）年度から1943（昭和18）年度だけでも、寄附総額は1,650円にのぼっている。現在の価格にすれば、約120万円になる⁽¹⁶⁾。この数字から、戦時下という厳しい条件の中でとぎれることなく多額の寄付をした安東長義の同志社大学図書館に対する熱誠をみてとることができる。

安東偉人文庫は他の特殊文庫と比較して、内容の特殊性と寄贈方法の独自性において稀有なものであったと言える。

（3）選書

安東偉人文庫は、同志社大学図書館が所蔵する事務用資料である「台帳」によると全

部で825冊が購入されている。以下に、特筆すべきことを記す。

- ① 選書は、「伝記類、人物評論」と限定されたが、図書館の裁量に任された。
- ② どのような出版情報（出版目録など）に基いて選書されたか不明であるが、次にあげる多くの書店を通じて購入されているところから見てさまざまな出版情報から選書したと思える。購入書店としては、丸善株式会社京都支店がもっとも多く、他に巖南堂、大丸京都店、若林書店、古田書店の名が見える。
- ③ 丁寧な受け入れ記録（台帳）が作成された。これは『安東偉人文庫』（同志社図書館）として手書きで作成されている。一冊ごとに、①番号、②著編訳者、③書名、④部、⑤冊、⑥頁数、⑦出版年月、⑧出版地、⑨発行所、⑩寸法、⑪受領月日、⑫受領原因、⑬価格、⑭分類、⑮番号、⑯備考が記録されている。

受け入れ記録（台帳）はどの文庫でも作成されているが、一括寄贈のものは一度に記入作成されたのに比べ、安東偉人文庫は毎年書き加えられる方法がとられている。台帳からは、その時代の重要な図書の収集において漏れないことを期した図書館側の努力の跡が感じられる。当時は戦時期で図書館側は人手不足に悩んでいたが、寄贈者の長年にわたる厚志に應えるため、図書館側は購入図書を優先的に整理し、閲覧に供している。また図書館側が寄贈者に適宜利用状況を報告し敬意を表していたことが知られる⁽¹⁷⁾。

（４）内容

1934（昭和9）年から1947（昭和22）年までに刊行された国内外の伝記類のうち825冊が収集されたが、その内訳は和書780冊、洋書7冊、翻訳書38冊である。

- ① 和書：当時の主要な伝記類が収集されている。寄附の始まった1934（昭和9）年には、例外的にそれ以前で図書館蔵書に漏れている和書8冊が購入されている。1935（昭和10）年以後は、その年に発行のものを購入している。台帳に記載された購入本の第1番は『新島襄先生傳』、最後の825番は『寒村自傳』である。参考として、その二冊を台帳に記録されている通りを表示しておく。

「第1番（著編訳者）デビス、ゼーデー著、山本美越乃訳、（書名）新島襄先生傳、（部数）一冊、（頁数）416頁、（出版年）昭和4年4月、（出版地）東京、（出版社）警醒社、（寸法）中、（価格）250円、（受領年月日）昭9.5.30、（受領原因）寄贈・安東長義、（分類・番号）983・50、（備考）24783」

「第825番 荒畑勝三、『寒村自傳』、196頁、昭22.7、東京、板垣書店、55円、昭22.9.13」

- ② 洋書：数が少ないが、欧米で刊行の人名関係書誌と日本人伝記が含まれている。
（例）

「250 Bible Biographies: thumb nail sketches of the men and women of the Bible/ by Frank S. Mead New York: Harper & Row, c1934」

③ 翻訳書：原著はほとんどが欧米のもの。一部に中国刊行のものが含まれている。

(例)

「保羅の研究：文化、宗教史概論／アドルフ・ダイスマン原著：ウィリアム・ジー・サイプル、郡山源四郎共訳／教文館 昭5」

翻訳書でとりあげられた人物には次のようなものがある。当時どのような人物に関心をもたれていたかを知る一助となろう。

イエス・キリスト、パウロ（保羅、キリスト教伝道者）、キエルケゴール（セーレン・キエルケゴール、デンマークの思想家）、ゲーテ（ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ、ドイツの詩人、劇作家、小説家）、ゴルドン（チャールズ・ゴルドン、英国の軍人）コロンブス（クリストファー・コロンブス、イタリアの探検家、航海者）、ダーウィン（イギリスの生物学者、地質学者）、チンギス・ハン（成吉思汗）、プーシキン（アレクサンドラ・プーシキン、ロシアの詩人、作家）、プラトーン（古代ギリシャの哲学者）、ペスタロッチ（ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ、スイスの教育実践家）、ヴェートオヴェン（ベートオーベン、ドイツの音楽家）、フランチェスコ（アッシジの聖フランシスコ、イタリアの聖人）、ヘレン・ケラー（米国の教育家、社会福祉活動家）、ベンジャミン・フランクリン（米国の政治家）、マホメット、メチニコフ（イリヤ・メチニコフ、ロシアの微生物学者）、モーツァルト（モーツァルト、オーストリアの音楽家）、レオナルド・ダ・ヴィンチ（イタリアの芸術家）、レフ・トルストイ（帝政ロシアの小説家）

（5）保管

特殊文庫は当初は独立のコレクションとして排架されていたが、いつの頃からかは不明であるが一般図書としたいに混架されるようになった。現在ほとんどの特殊文庫は刊行年、和洋の別を問わず一般書庫内にて分類順に混架されている。

安東偉人文庫では、各冊ごとに、蔵書印（「同志社（大学）蔵書印」）の他に受領印（朱印）、文庫印（朱印）及び文庫購入理由を記した印（青）が押されている。受領印には、受け入れ年月日、購入書店、蔵書番号、安東偉人文庫としての受け入れ番号が記入されている。

文庫購入理由印には、次の二種の表記がある。

「安東偉人文庫 本書ハ校友安東長義氏の寄附金ニヨリ購入シタルモノナリ 同志社大学図書館」

「本書は校友安東長義氏ノ厚意ニヨリ同氏ノ寄附金ニテ購入シタル人物ニ関スル図書ノ

一部ナリ 同志社大学図書館」

（6）文庫の意義

1930年代の同志社大学図書館の状況について、同志社大学図書館報『びぶりおてか』は次の3点を指摘している⁽¹⁸⁾。

第一は、年間図書費の慢性的欠乏である。本図書館は1920（大正9）年の新図書館（現在の啓明館）の建設により、図書館充実の機運が盛り上がり、蔵書拡充のために年間図書費の増額を図った。しかしそれは3,000円内外に過ぎず、年間増加数も1,000冊内外で十分ではなかった。

第二は、蔵書数の欠乏を補うための校友・篤志家からの寄贈文庫の増加である。まずこの時期の先鞭を切ったのは「小林文庫」（1925年、1,011冊）であったが、同志社創立60周年を迎えた1935（昭和10）年前後にその頂点に達する。それらには、「吉田文庫」（1933年、吉田作弥旧蔵書586冊）、「岡田文庫」（1933年）、「安東偉人文庫」（1934年）、「原田文庫」（1934年、原田助旧蔵書720冊）、「横田文庫」（1935年、横田安止寄贈図書154冊）、「村上文庫」（1935年、村上小源太旧蔵書）、「加藤文庫」（1935年、加藤小太郎旧蔵書）、「高柳文庫」（1936年、高柳松一郎旧蔵書）などがある。

第三は、滞貨資料の増加である。1935年の時点で、所蔵図書は70,000冊を超えたが、整理を終了し、目録（当時はカード目録）から検索可能となった図書は約20,000冊に過ぎなかった。あとの約50,000冊は検索不能で未整理図書（滞貨）となっていた。

このような状況の中で、安東偉人文庫は毎年50冊～70冊平均で増加していった。この文庫が滞貨に陥らなかったことは上述したとおりである。

それでは、安東偉人文庫をどのように評価すべきであろうか。まず同志社大学図書館自体は、この文庫を次のように評価している。

「主として1934（昭和9）年設置の時期より戦前までの、わが国で出版された伝記書の多くを集めた特殊収書として特徴あり、また当時の学生生徒に裨益したものである」といえる⁽¹⁹⁾。

この評価によると、安東偉人文庫は当時の「わが国で出版された伝記書の多くを集めた」とみなされている。ただし当時国内で刊行された「伝記書」（偉人伝記および評論としての伝記類）の発行数の正確な数を現在調査不足で把握しえないので、この文庫の収集率の正確な数も不明である。しかし台帳からは毎年良質な伝記類が50冊以上確認されるので、伝記類に限ってはかなりの充実をもたらせたと言って差し支えはない。

いま一つ注意すべきは、昭和10年代の同志社大学図書館の伝記類の収集方法である。

この当時の蔵書から見ると、伝記類は安東偉人文庫外にも個人および団体からの個別の寄贈、「校友文庫」（主に同志社卒業生による寄贈書）「荒木文庫」（荒木和一氏旧蔵書）など他の特殊文庫に入っていたもの、あるいは「同志社高商図書室」から戦後編入されたもの、および少数ではあったが図書館独自の予算で購入したものなどから構成されている。複雑で多様なルートを経て蔵書構築されていると言えるが、数的に見てその収書の中心に安東偉人文庫があったのは間違いなく、「学生生徒に裨益した」ことも間違いのないであろう。

また前述したように、秦孝治郎元同志社理事長はこの文庫を「青年立志の材料」と評している。いずれにしても「偉人」の名が冠せられた裏には、同志社から新島精神にかなう多くの人材の輩出を願った安東の思いがあったのは間違いのないであろう。ただ惜しむらくは、安東長義からの寄附が1947年度以後続かなかったことであろう。

むすび

一社会奉仕のサーバントとして一

安東長義は、生涯にわたり同志社大学に対しては安東偉人文庫寄贈をはじめ「厚生学」や神学教育への後援、校庭美化のための植樹などを行った。また家庭学校に対しては財政的支援を逝去直前まで行った。安東は、実業で得た多額の金と多くの労力と知恵を惜しみなく以上の教育や社会事業の支援のために使った。これはまさに留岡幸助のいう「社会奉仕」そのものであった。それでは安東の生涯を貫いた社会奉仕の精神はどこからきたのであろうか。

それは安東が若き日の五年間を過ごした巣鴨の家庭学校の生活体験と寝食を共にする中で教えられた留岡幸助の思想からきたものであった。安東は、留岡から生涯の指針となった社会福祉（社会事業）、宗教（キリスト教信仰）、奉仕精神の三つを学んだ。中でも奉仕精神は安東の生涯の行動と思想の根拠となり指針となったものである。

安東に決定的影響を与えた留岡の奉仕精神とはいかなるものであったか。留岡自身もこの精神を同志社の生活と新島襄の直接の訓育によって得たものであった。留岡と新島襄との関係については、井上勝也同志社大学名誉教授による優れた論考「留岡幸助と新島襄」（『同志社時報』93号、1992）があるのでそれに譲ることとする。留岡は、同志社と新島襄から「社会奉仕」の思想を学び、それを実践することにより日本の社会事業の開拓者になった。彼の社会奉仕の思想は、多くの論説にあらわれているが、たとえば「公民道徳と社会道徳」なる論文で、次のように述べている。

「今日謂ふ所の社会奉仕の道徳は、強き者が弱き者の為に尽す道徳である。此の起源を索ねて見ると、新約全書馬太伝第二十章二十節より二十八節に在る、基督の弟子に示し

た教訓、就中「爾曹の中大ならんと欲ふ者は使はるる者となり、又首たらんと欲ふ者は僕となるべし」と言へる教訓に基くものであらうと思ふ。・・・故に富める者、学殖ある者、時間に余裕ある者、権力ある者等、所謂社会上強き者は、弱き者の為に、其の富と学問と権力とを使用して、社会奉仕を為さねばならぬ、是れ一の大なる社会道德である。」⁽²⁰⁾

ここから指摘できる留岡のすぐれた点は、社会奉仕の根拠を聖書に求めたこと、それを社会道德と位置づけたこと、その実践を「社会的強者」に求めたことである。

留岡はよく「役人は公僕 (public servant) であるべきであり、自分は社会奉仕 (social service) にしたがうサーバント (しもべ) である」、と述べたという⁽²¹⁾。安東は留岡の忠実な継承者として、生涯にわたり社会奉仕に努め、最後は家屋敷まですべてを失った。しかし自らは留岡の志を継ぎ、「社会奉仕のサーバント」として悔いない生をきたたものと思われる。「虎は死して皮を留め、人は死して名を残す」という古き諺がある。多くの人にとっては死して名を残すことは難しいけれど、安東長義はその名を残した数少ない一人であったと言えよう。

(注)

(1) 同志社大学図書館の蔵書および文庫については、「同志社大学図書館の歴史」(その一～その15)『びぶりおてか』(同志社大学図書館報)1967年7月～1978年10月に、詳しい紹介がされている。また宇治郷毅「同志社が生んだ図書館人—同志社図書館山脈の源流と先駆者たち」『同志社大学図書館学年報』第38号、2012の「同志社大学図書館」の項でもふれられている。文庫には、一般の篤志家による寄贈の「・・・文庫」と呼ばれているものと、同志社大学図書館が特別の意義(寄贈の経緯と資料的価値)を認めて「特殊文庫」と指定しているものの二種類がある。

一般の寄贈による「・・・文庫」とよばれるものには、「森田記念文庫」(明治34、769冊)、「フリント記念文庫」(明治40、260冊)、「三宅文庫」(大正8、1、370冊)、「小林文庫」(大正14、1、011冊)、「吉田文庫」(昭和8、586冊)、「岡田文庫」(昭和8、798冊)、「安東偉人文庫」(昭和9、825冊)、「原田文庫」(昭和9、720冊)、「横田文庫」(昭和10、154冊)、「村上文庫」(昭和10、188冊)、「加藤文庫」(昭和10、1、833冊)、「高柳文庫」(昭和11、467冊)、「浮田文庫」(昭和23、416冊)、「デントン文庫」(昭和23、458冊)、「下村文庫」(昭和49、424冊)がある。

また「特殊文庫」には、次の11文庫がある。「小室・沢辺記念文庫」(明治22、5、146冊)「植木文庫」(明治26、806冊)、「新島記念文庫」(明治26、3、826冊)、「愛山文庫」(大正6、3、568冊)、「生江文庫」(昭和20、2、700冊)、「徳富文庫」(昭和22、1、900冊)、「荒木英学文庫」(昭和33、20、000冊)、「竹林文庫」(昭和36、文書類3、034点)、「ケーリ文庫」(昭和49、947冊)、「同志社英学校蔵書」「波里須理化学学校蔵書」である。

- (2) 安東長義「予の巢鴨時代を思う」『留岡幸助君古希記念集』p.830～833に、巢鴨の「家庭学校」での詳しい記述がある
- (3) 安東と岡本教会との関係は、中村敏夫『信徒と教職のあゆみ』のp.33～36「信徒の賜物：安東長義」に詳しい記述がある。
- (4) 安東の選挙立候補については、『衆議院議員選挙の実績 第2巻』自治省選挙部、1991、p.201

- 「選挙区別基礎資料 第22回総選挙」のうち「京都府」の項目参照。
- (5) 雑誌『人道』は1905（明治38）年5月15日に家庭学校内の「人道社」で創刊され、1932（昭和7）年8月15日の322号で終刊した。その後1933（昭和8）年5月に復刊し、1944（昭和19）年9月の135号まで続いた。その雑誌としての長命さと内容において日本社会事業史のみならず近代日本史の貴重な資料を提供したことで意義が大きい。安東（当時は旧姓「養田長義」）が「人道社員」として編集に関与したのは明治44年～大正2年にかけての短期間であった。しかしその後も「人道社」経営を支え、時に記事を執筆している。（参考文献：『『人道』解説・総目次』不二出版、1983 p.34～35 『『人道』をめぐる人々』）
- (6) 留岡の伝記、評伝は多数ある。ここでは、『留岡幸助著作集』全5巻、同志社大学人文科学研究所1978年、高橋善夫『一路白頭ニ至ル』岩波新書、1982年、室田保夫『留岡幸助の研究』不二出版、1998を参照した。
- (7) 安東は『人道』に、昭和6年から7年にかけて「大阪社会事業巡礼記」を発表している。内容は、「博愛社」（母子保護施設）、「大阪婦人ホーム」（基督教婦人矯風会大阪支部による困窮婦人のための救護施設）「弘済会」「大阪と方面委員制度」「淀川善隣館」大阪労働共励館」「浪速少年院」「河陽学舎」「大阪基督教女子青年会」「石井記念愛染園」のルポである。大阪近辺に限られたごく一部の見聞記ではあるが、日本が戦時体制下に入りかけた頃の日本の社会事業の一端を報告したもので貴重である。
- (8) 『同志社教育の伝統 同志社大学厚生学教育後援会の趣旨』p.4～6、p.12～15参照。
- (9) 「楠樹並木」の一角には、「樟樹並木 昭和 年安東長義氏寄付昭和三十四年九月 同志社」という碑がある。（昭和何年に寄付したかの部分は空白）安東が今出川校庭に大量の楠を植樹した理由は、本人が書いたものが無いので類推するしかない。次の六つほどの理由が考えられる。第一は、安東に教育は出来るだけ自然に近い中ですべきだという思想があったからと思われる。これは、若き日に巣鴨の家庭学校の「静閑にして樹木鬱蒼たる」土地で生活した経験に根ざしている。これは自然の中で非行少年に対する感化教育を行った留岡の思想と実践が根拠となっている。第二は、安東は薬業界にあり、楠が薬剤の採取できる貴重な樹木であることを知っていたためである。第三は、楠は成長が遅いが年数がたつと立派な木になるので、「楠学問」という言葉もある。安東は、この言葉を知っていて、同志社の学生に速成粗製ではなく大器晩成を期待したのかもしれない。（『留岡幸助 自叙・家庭学校』日本図書センター、1999、p.93参照。）他の三つは、河野仁昭の見解である。河野は、著書『キャンパスの年輪—同志社今出川校地—』同志社大学出版部、1985 p.129「楠並木と松並木」の中で、安東による樟樹の寄贈は創立60周年（昭和10）の祝賀、昭和9年9月の室戸台風による今出川キャンパスの荒廃を修復するため、および用材売却による同志社財政支援のためという理由を挙げている。
- (10) 「同志社々報」39号に、「一金 壹百円也 校祖旧邸清掃修繕費宛 六月十三日 安東 長義氏」の記述あり。（同社報は『同志社校友同窓会報』18号、1933年11月15日に収録）
- (11) この「同志社々報」（48号）は、『同志社校友同窓会報』88号、1934年7月15日に掲載。
- (12) 秦孝治郎「嗚呼、安東・海老沢両君を憶う」『同志社タイムス』1959年1月28日、3面
- (13) 宇治郷毅「同志社が生んだ図書館人—同志社図書館山脈の源流と先駆者たち」『同志社大学図書館学年報』38号、2012 p.74参照。
- (14) 「特殊文庫（その一） 小室・沢辺文庫」『びぶりおてか』No.1、1967.7 p.7
- (15) 「特殊文庫（その7） 小林文庫」『びぶりおてか』No.13、1973.2 p.5
- (16) 『物価の文化史事典』（展望社）中の「日本銀行調査・100年間の総合卸売物価指数の推移」によると、昭和10年を基点に平成26年の物価は約731倍である。安東の寄附は、約120万円に相当す

る。1930年代の同志社大学図書館の年額図書費が約3,000円とすると、年額100～300円の寄附が全分野の中でごく小さな一部の「伝記類」に当てられた大きさが理解できる。

- (17) 事務用資料『新日記』（図書館の業務上、人事上の諸問題について記した日記）に、図書館が安東長義にあてた礼状の写しが残っている。たとえば昭和11年5月1日付けの礼状には、150円の寄附を受けた時の感謝が綴られている。
- (18) 「同志社大学図書館の歴史（その10） 1930年代の図書館近代化」『びぶりおてか』No.18、1975.10 p.9
- (19) 「同志社大学図書館の歴史（その10） 1930年代と図書館近代化」『びぶりおてか』No.18、1975.10 p.9
- (20) 『斯民』17編2号、1922年2月、『留岡幸助著作集』第4巻 p.134
- (21) 高橋善夫『一路白頭ニ至ル』p.209～210

【参考文献】

- 『同志社教育の伝統』同志社大学厚生学教育後援会、1942年9月
- 中村敏夫『信徒と教職のあゆみ』神戸学生青年センター出版部、1992年8月（「信徒の賜物 安東長義氏」p.33～36）
- 土井洋一『家庭学校の同行者たち』大空者、1993（「安東長義」p.138）
- 『岡本教会80年 日本キリスト教団岡本教会』同教会発行、2012年7月 p.25～26に安東家（安東忠次郎、安東長義など）と岡本教会の関係についての記述がある
- 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988（遠藤彰「安東長義」p.76）
- 高瀬善夫『一路白頭ニ至ル』岩波新書、1982
- 同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集』全5巻、1978-1981、同朋舎出版

（本稿執筆のため、兵庫県立図書館、神戸市立図書館、同志社大学図書館、同志社社史資料センターより多大な援助をいただいたことを感謝します。また日本キリスト教団岡本教会赤川祥夫牧師よりご教授いただいたことをこの場を借りてお礼申し上げます。）

（うじごう つよし。元同志社大学社会学部教授、元国立国会図書館副館長）